たまシネマ通信　2017年6月18日発行

TAMA CINEMA 通信

TAMA CINEMA FORUM
TAMA映画フォーラム実行委員会　〒206－0025 多摩市永山1－5　ベルブ永山（永山公民館内）
代表：042－337－6661　直通：080－5450－7204　http://www.tamaeiga.org/

特別上映会 6/18㊐ ベルブホール（ベルブ永山 5F 京王永山駅･小田急永山駅下車徒歩約２分）

上映スケジュール

10:30 ― 12:03　第１回上映
13:30 ― 15:03　第２回上映
15:30 ― 16:06
　特別上映『the place named』
16:30 ― 18:03　第３回上映
19:00 ― 20:33　第４回上映

＊全席自由席・各回入替制
＊開場は各回 15 分前
＊上映時間は変更になる場合があります。
＊特別上映作品は『息の跡』鑑賞の方は半券提示で無料でご覧いただけます。

チケット料金

前売	大人（中学生以上）	1,000円
当日	大人（中学生以上）	1,200円
	子ども（4歳～小学生）	600円

＊ TAMA 映画フォーラム支援会員、障がい者とその付添者１名は当日 1,000 円です

15:30 ～ 16:06 に『息の跡』小森はるか監督の過去監督作品『the place named』を上映。
『息の跡』鑑賞の方は半券提示で無料でご覧いただけます。（『the place named』のみ鑑賞は当日 600 円）

企画者からのメッセージ

『息の跡』は、岩手県・陸前高田市で“たね屋（種苗店）”を営む佐藤貞一さんの日常を追ったドキュメンタリー映画だ。タイトルの「息の跡」は、バスの窓ガラスに白く曇って残る、さっきまで乗っていた人の呼気の跡から連想して付けられた。「今はそこにいないけど少し前には誰かがいたという目に映る温もり。陸前高田の街にはそれがたくさんあるような気がした。」と語る小森監督。彼女は、東日本大震災後に陸前高田市のとなり町に移住し、地元の人々との交流のなかで佐藤さんに出会い、その営みの細部を知りたいと 2013 年 1 月から 2016 年 6 月までの月日をかけて佐藤さんのもとを訪れて作品に収めた。

とても表現しきれないような体験をどうにかして伝えようとする佐藤さんと、震災時の映像や津波の映像を用いるのではなく、佐藤さんの“たね屋”としての日常に寄り添いカメラを向ける小森監督。体験を語り、記録することに向き合い続けてきた二人の共同作業で生まれた本作は、彼の地で起きては消え行く“表現できないもの、わからないもの”の傍らまで近づいては、今はそこにいない誰かの、また、今はまだここにいない誰かへの“息の跡”を確かな温もりと共に感じさせる。それは記憶の風化が進む被災地へ想いを馳せるだけにとどまらず、わたしたちの身の回りにもありふれているはずの“言葉にならないもの”への向き合いかたをも教えてくれる。

（宮崎洋平）

＜保育サービスの実施＞　13:30 ～の回の上映中および『the place named』上映中、お子さま（満 1 歳以上 / 各回先着 10 名）をお預かりいたします（無料）。お申込みは HP まで
特別上映会特設ページ http://www.tamaeiga.org/special/ikinoato

『息の跡』とあわせて観たいおすすめ映画６選

語る／聞く

『うたうひと』（監督：酒井耕・濱口竜介／ 2013 ／ 120 分）

『なみのおと』(2011)『なみのこえ』(2013) に続く東北三部作の第三作。前二作で東日本大震災の記憶を残すために被災者の“対話”を記録してきた両監督は、本作で直接の被災体験から一旦離れ、東北地方伝承の民話の語り聞かせにおける“対話”を記録する。時と場所を越えて伝承する民話の起点となる対話の瞬間を、両監督は創造的な方法で主観ショットのように切り取る。そこに現れる、ひとつの「語り」が「聞かれる」ことよって反響し幾重にも広がるような感覚とともに、観客は「語る／聞く」という日常的な行為の持つ豊かな可能性に改めて気づかされる。

『息の跡』での佐藤さんの「語り」とカメラを持った小森監督の「聞く」の関係性、そしてその物語がスクリーン越しに私たち観客へ届くことについて考えてみると興味深い。（Y.M）

「表現」と「祈り」

『この空の花 長岡花火物語』（監督：大林宣彦／ 2012 ／ 160 分）

1945 年の長岡空襲。2004 年の新潟県中越地震。そして 2011 年の東日本大震災と新潟豪雨。数々の災害を乗り越えてきた新潟県長岡市で一人の女性新聞記者が不思議な体験を重ねていく。「まだ戦争には間に合う」という舞台劇と長岡花火が、空襲や地震の被災者への追悼、そして復興への祈りと解け合い、重層的な物語を紡ぐ。第 4 回 TAMA 映画賞最優秀作品賞受賞。

従来の「映画」という枠を越えた様々な手法を織り交ぜたイマジネーションあふれる語り口。そこまでして表現せざるを得なかった大林監督の熱い想いは、一人の表現者による世界への祈りとして観客の心に響く。それは『息の跡』で震災体験をどうにか残そうとする佐藤さんの姿にも言える。必死の想像力が過去そして未来への祈りとなって拡がっていく。（Y.M）

「DIY」あるいは「ブリコラージュ」

『オデッセイ』（監督：リドリー・スコット／ 2015 ／アメリカ／ 142 分）

「火星の人」（アンディ・ウィアー著）が原作の奇跡の SF サバイバル映画。有人探査中の事故により火星にひとり取り残された宇宙飛行士（マット・デイモン）。彼は、4 年がかりの NASA の救命を悲嘆にくれることなく待ちながら、その場にある設備や材料を駆使して生存に必要なものを生み出していく。水を化学的に生成し、その上何とジャガイモ畑までも。

その驚くべき DIY ぶりは、『息の跡』の佐藤さんにも当てはまる。彼は、津波で失った店舗の代わりにプレハブ小屋を建て、自力で井戸を掘り当てて水を確保し、たね屋を営んでいる。必要なものをありあわせの材料を使って手作りしている佐藤さんのブリコラージュ（器用仕事）。彼の身振りは、生き延びるための「藝術＝技藝（アート）」である。（T.S）

時を越えて語り／歌い継がれる

『PARKS パークス』（監督：瀬田なつき／ 2017 ／ 118 分）

井の頭恩賜公園開園 100 周年記念映画。長年人々に愛されて来た公園を舞台に、時を越えた出会いの美しさを、様々な音楽やミュージカルと共に瑞々しいタッチで描く。吉祥寺で一人暮らしをする大学生の女の子（橋本愛）が偶然出会った高校生の女の子（永野芽郁）と一緒に人探しをする中で遭遇する、とある未完成の歌。その歌に心を動かされた彼女たちは、バンドを組んで曲を完成させようとする。 約半世紀前のカップルが歌った曲が、現在の人の心を動かし、それがアレンジされてまた歌われる。

『息の跡』で自らの震災体験が綴られた佐藤さんの本もそんなふうに世代を渡って読み継がれ、数十年数百年先の人へと届いたらと、そんな期待が頭をよぎる。（T.S）

さまざまな切り口から『息の跡』に関連するおすすめ映画をご紹介します。

土地の記憶

『光りの墓』（監督:アピチャッポン･ウィーラセタクン／ 2015 ／タイ、イギリス、フランス、ドイツ、マレーシア／ 122 分）

『ブンミおじさんの森』(2010) でカンヌ国際映画祭パルムドールを受賞したウィーラセタクン監督が、自らの故郷であるタイのイサーン地方を舞台に描く異色のドラマ。タイ東北部のかつて学校だった病院には、“眠り病” にかかった兵士たちがベッドで眠っている。病院のある場所は、かつて古代の王様の墓があった場所。当時の戦士たちの魂が現在の兵士たちを眠らせて、その夢の中で戦いを続けているという。病院の敷地を歩きながら、兵士を世話する女性ジェンに、特殊な能力を持つ女性ケンが、その場所で大昔に起こったことを話すシーンは、「土地の記憶」が呼び覚まされるようで興味深い。それは、『息の跡』で佐藤さんが現在の被災地と同じ地域で江戸時代に起こった津波のことを話すシーンと重なる。（T.S）

『コロンブス 永遠の海』（監督：マノエル・ド・オリヴェイラ／ 2007 ／ポルトガル、フランス／ 75 分）

ポルトガルの巨匠オリヴェイラ監督作品。「新大陸発見で知られる冒険家クリストファー・コロンブスは、イタリア人ではなくポルトガル人だった」という新説に触発されて、コロンブス生誕の謎を追った研究者とその妻の半世紀に渡る旅。彼らが遠く広がる海を眺めてコロンブスに思いを馳せるシーンでは、現在の風景に壮大な時間が流れ込むようなアクロバティックな感覚が味わえる。

このシーンもまた上記と同様、『息の跡』のかつて同じ場所で起こった震災のことを話すシーンを想起させる。この震災の記録は、当時来日していたスペインの宣教師が自国に戻って伝えたもの。佐藤さんが遭遇したその記録には、コロンブス＝ポルトガル人説のように、地理感覚がぐにゃりと歪むような驚きがある。（T.S）

果てなき夜に、ありふれた人々の「声」が共鳴する ― もうひとつの『息の跡』

15:30 ～ 16:06 上映　『the place named』（監督：小森はるか／ 2012 ／ 36 分）

あらすじ：

戯曲『わが町』（作：ソーントン・ワイルダー）をもとに、田舎町に生きる少女の一日の生活と、『わが町』第３幕の舞台稽古をしている劇団員たちが交互に描かれる。死者たちが生きている世界について話す戯曲の言葉は田舎町の日常に重なると共に、演じている役者自身にも投影される。役者とのプロセスの中で出来上がった作品である。

『息の跡』では「記録」を通じて現在が過去と未来に開かれ共鳴するような瞬間が描かれるが、本作では二つの異なる世界の共鳴が描かれる。

ソーントン・ワイルダー作「わが町」は、アメリカ北東部の架空の町を舞台に、ありふれた人々の生活とその変遷が描かれた戯曲である。本作に登場する劇団員たちは、死者が生きている世界を想い悲しむその第３幕の断片を、しめやかに読み上げる。そこにそこはかとない鎮魂の雰囲気が漂うのは、抑制された声だけでなく、テキストを読む行為自体が、いわば死んだ声を生き返す行為でもあるからだろうか。

もう一方の田舎町の少女のパートに登場する夕闇を漂う赤いライトもどこか盆提灯のようであり、喪の雰囲気を感じさせる。こちらでは、８月の終わり、誰もいない教室を訪れる新任教師の彼女が過ごす一日をカメラが静かに見守る。光と闇を捉えた美しいショットがゆるやかに呼応し、いつしか二つの異なる世界の声が、共鳴し始める。遠く離れた暗闇の先で、互いのこだまのように。観客は、身体を沈める劇場の暗闇の奥に、その果てなき夜の声を聞くことになるだろう。（T.S）

5/6㈯
特別上映会
レポート

ひなぎく

SEDMIKRÁSKY

監督：ヴェラ・ヒティロヴァー／1966年／75分／カラー

東佳苗さんと飾りつけられた会場のコーナー

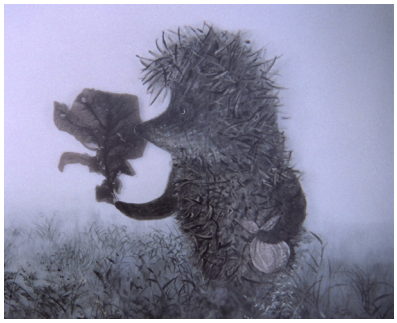
チェコ映画『ひなぎく』の上映会は、女性９人のチームで案を出して進めていきました。上映会場が殺風景という意見から少し飾りつけをしよう、ゲストの東佳苗さんがニットデザイナーだから編んだ花を飾ろう、チェコの映画だからチェコの小物も飾ろう、もう一人のゲストのチェコ人で日本文化にも詳しいペトル・ホリーさんの著書も置こうという話になり、そうしたら東さんから装飾をしたいという申し出があり、公民館のほんの片隅を思いっきり素敵に飾り付けてくれました。

一つのROOMが出現し、来場の女性たちが思い思いに横たわり、座り、写真を撮られていました（男子も座ってほしかった）。上映会では現代のガールズムービーとして東さんの『Heavy Shabby Girl』を併映。トーク時には、この日のために東さんが自作の短編何本かを編集しなおした映画『I wonder.』も上映。未来のガールズムービーでしょうか。ペトルさんと東さんのトークでは、’66年の映画がこんなにも現代の女性たちを魅了するとはというところから、“可愛い”を解剖するところまで話されました。

（小野寺綾子）

次回特別上映会

7/22㈯　ベルブホール



©2016 F.S.U.E. C&P SMF

ユーリー・ソルシュテイン監督特集上映

「アニメーションの神様、その美しき世界」

高畑勲監督や宮崎駿監督が敬意を払うロシアの世界的アニメーション作家の傑作をどうぞお楽しみください。（代表作６作品上映）

本作を初めて鑑賞した後、スクリーンの向こう側の世界に迷い込んだような不思議な感覚からなかなか抜け出せなかった。６作はそれぞれ戦争や革命から、ロシア民話まで様々ではあるが、皆共通して映像に独特な世界観があり、その美しさに圧倒された。

そのなかの１作『霧の中のハリネズミ』では、多層のガラス面に繊細な切り絵を配置する技法が使われ、幻想的な世界を作り上げている。その奥行きのある映像は、まるで主人公のハリネズミ「ヨージック」と一緒に霧の中をさまよっているような気持ちにさせる。また、その美しい映像の中、出てくるキャラクターは皆可愛らしいのに、どこか不穏なさみしい雰囲気が漂っているのも魅力の一つである。（企画者：都築彩花）

第27回映画祭TAMA CINEMA FORUMは 2017.11.18㈯～11.26㈰ 開催！

支援会員制度のお願い

当映画祭を一緒に支えて頂ける支援会員を募集しています。映画を「観る人、観せる人、創る人」の交流の場づくりを通じた、地域と日本映画界の活性化に向けて、資金面でサポート頂けませんか。

ご支援頂いた方には特典をご用意していますので、ぜひご協力をお願い致します。

［支援金寄付　個人会員］一口1000円

郵便振替番号　00160－5－541123

加入者名　TAMA映画フォーラム実行委員会（ご不明な点はお問い合わせください）

特典①：映画祭チラシ送付
特典②：映画祭パンフレット贈呈
特典③：特別上映会割引（当日チケットを、支援会員特別価格に。上映会は２～８月の間に４～５回開催予定）
その他特典もご用意する予定です。

TAMA映画フォーラム実行委員会ホームページ　www.tamaeiga.org

@tamaeiga（最新情報をフォロー）　**www.facebook.com/tamaeiga**（facebookページに「いいね！」で参加）

たまシネマ通信　June 2017　Issued by *TAMA CINEMA FORUM*
Editor in Chief　*T. Sato*　Editorial Design　*F. I*　Contributing Editors　*TAMA CINEMA FORUM Staff*　禁無断転載